

九州歯科大学が行ってきた8020（はちまるにいまる）調査について報告します。

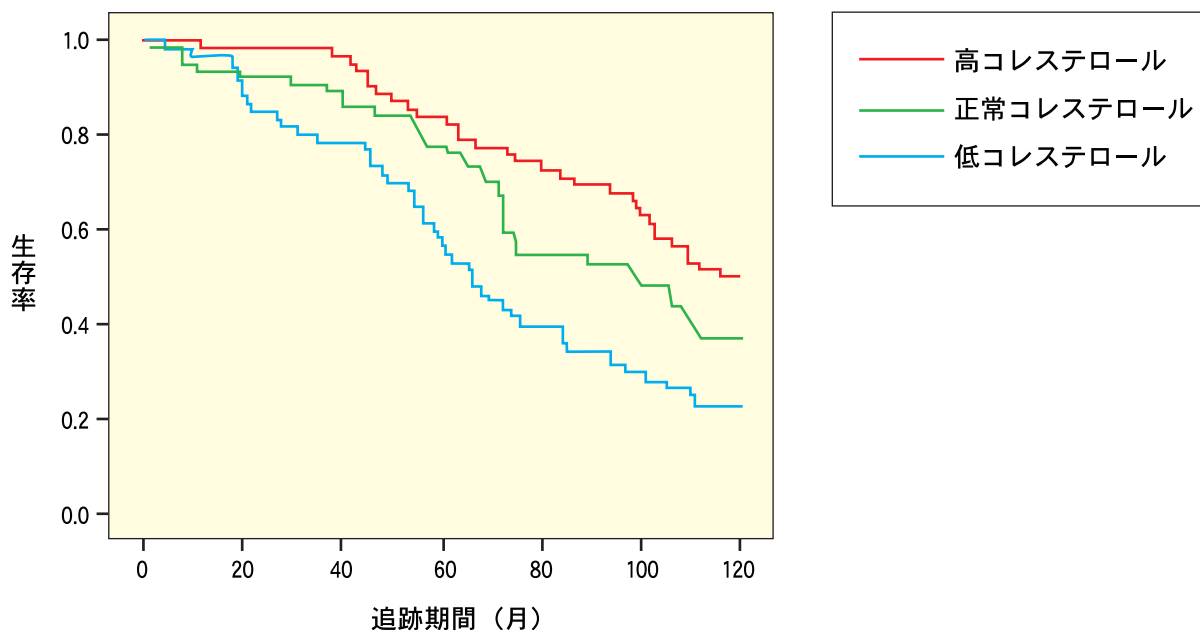
九州歯科大学では平成10年から口腔や全身の健康状態と病気の発生との関連について調査してきました。どのような方が、がん・脳卒中・心筋梗塞・肺炎などになりにくいのが、また長寿なのか、について明らかにしたいと考えています。このニュースでは平成10年に始まった調査研究のうち、コホート追跡研究の結果をまとめましたのでご紹介します。

◆対象者 県内9市町村（当時の行橋市、築城町、勝山町、豊津町、新吉富村、豊前市、苅田町、戸畑区、宗像市）に在住する、大正6年生まれの80歳の方824名（男性305名、女性519名）について追跡調査を行いました。今回の解析では福岡県における85歳の時点から10年間の追跡調査の結果をもとにしました。

① 85歳高齢者の血清コレステロールと死亡率の関係

超高齢住民での血清総コレステロール値と死亡率の関係についてはあまり知られていません。そこで、2003年に断面調査をした85歳住民207名を対象に10年間の生死を前向きに調査しました。10年後の2013年までに120名が死亡、70名が生存しましたが、17名が追跡できませんでした。総コレステロール値から高コレステロール群（209 mg/dL以上；69名）、正常コレステロール群（176～208 mg/dL；69名）、低コレステロール群（175 mg/dL以下；67名）に3分割したところ、図1のように、低コレステロール群が最も生存率が低いことがわかりました。各種影響因子で補正しても、低コレステロール群の死亡率は高コレステロール群の1.7倍で、血清総コレステロール値が1mg/dL上昇すると死亡率は0.9%低下しました。また、血清LDLコレステロール値が1mg/dL上昇しても死亡率は0.8%低下しました。以上から、85歳の超高齢住民では、総コレステロールとLDLコレステロールが低いと寿命が短くなることが示唆されました。

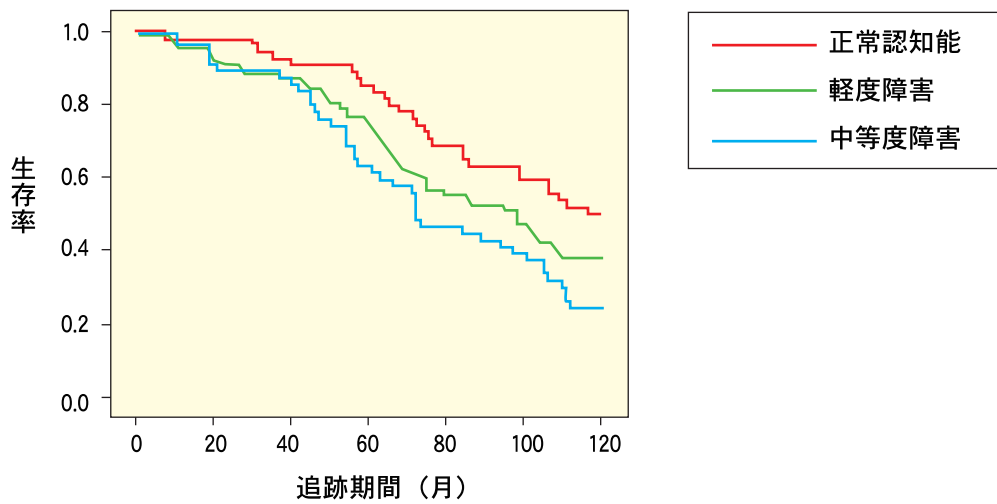
図1 コレステロール3群別の累積生存率



② 85歳地域住民高齢者の認知機能と死亡率の関係

超高齢住民における認知障害と死亡率の関係はこれまで明らかにされていません。そこで、2003年に85歳住民205名を対象に認知機能評価Mini-Mental State Examination (MMSE)を用いて測定し、その後10年間生死と死因を追跡調査しました。120名が死亡、70名が生存しましたが、17名が追跡できませんでした。死亡120名のうち、38名が心血管病死、22名が老衰死、21名が呼吸器疾患死、16名が癌死でした。累積生存率は図2のように、正常認知能群で高く、認知障害群で低いことがわかりました。各種影響因子で補正しても、MMSEが1点上昇すると全死亡率は6.3%低下、心血管病死は7.6%低下、老衰死は9.2%低下しました。以上から、85歳の超高齢者では、認知能が低下すると心血管病死や老衰死が増加し、その結果として全死亡が増加することが示唆されました。

図2 認知機能3群別の累積生存率



◆ 現状のデータからみえる健康の秘訣は

- 総コレステロールと LDL コレステロールを下げないことが長寿につながる。
- 認知機能を保つことは長寿につながる。

◆ 参考文献リスト

- コレステロールと死亡率の関係** Takata, Y. et al. : Serum total cholesterol concentration and 10-year mortality in an 85-year-old population. Clin. Intervention Aging 9: 293-300, 2014.
- 認知機能と死亡率の関係** Takata Y. et al.: Cognitive function and 10-year mortality in an 85-year-old community-dwelling population. Clin. Intervention Aging 9: 1691-1699, 2014.

福岡 8020 調査研究事務局

九州歯科大学地域健康開発歯学分野内

〒803-8580 北九州市小倉北区真鶴2-6-1 TEL: 093(582)1131 FAX: 093(591)7736

Home page: <http://www2.kyu-dent.ac.jp/dept/oral-health>

(本ニュースのバックナンバーは“最新情報”の項からダウンロードできます)